

薩摩藩 英國留學生 同行記

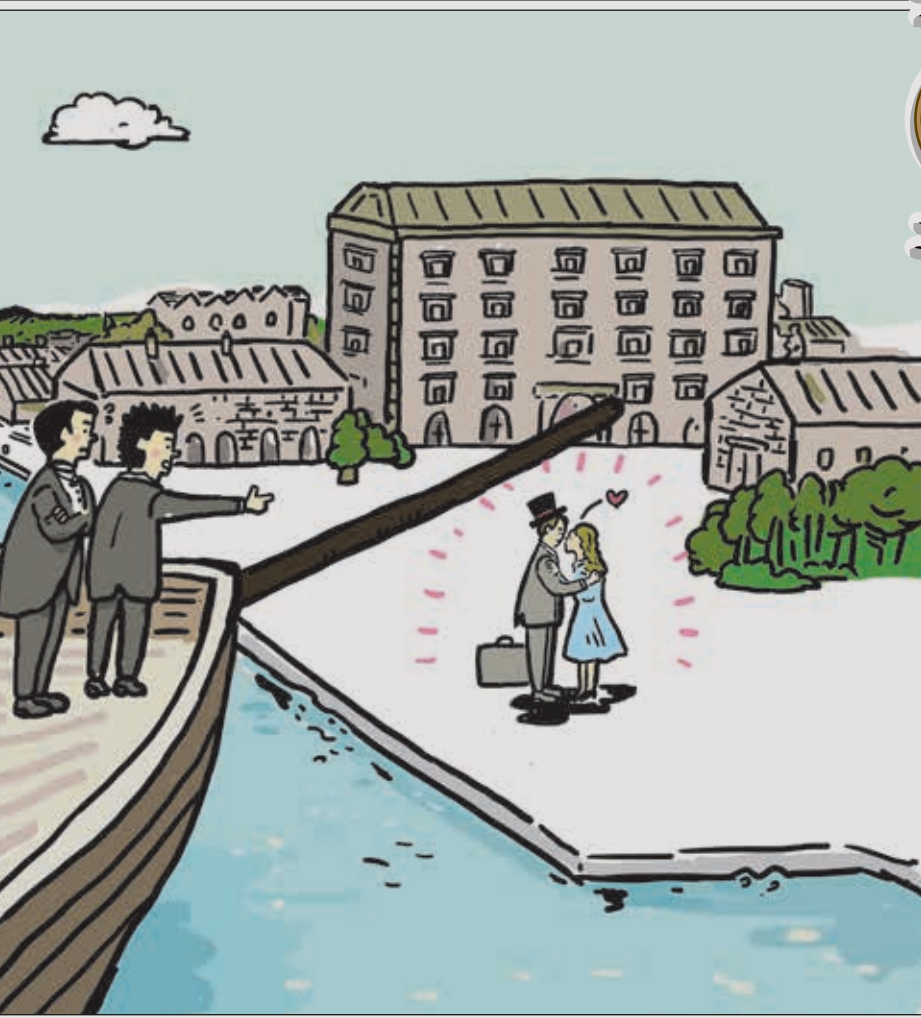
Record of Satsuma Students Travel Companions

留学生、船上で 西洋文化に 触れる

第2回
全6回

参考資料／薩摩海軍史 薩摩藩英國留學生

画／竹添 星児 本文監修／東川 隆太郎



現在イギリスへ向かっている薩摩藩英國留學生一行は、香港やボンベイ、スエズなどを経由しながら旅程を進めている。本紙記者の取材によると、一行はいくつかの困難に遭遇しながらも異国の文化に触れ、多くの衝撃を受けているようだ。

決意の断髪

食事と暑さに苦しむ

羽島はしから乗船後、留學生一行を襲った最初の苦難は船酔いと西洋料理中心の食事であった。留學生の一人、松村淳蔵まつむらじゆんぞう（本名・市来勲十郎いちきゆうじちろう）は「味ある物は橙だいだいと米計はちにてこと、出港当初は食べられるものだけでなんとかしのいでいたと振り返る。また乗船三日目には留學生らが自らまげを切り落とした。まげを珍しがる外国人船員らのぶしつけな視線に耐えかねての事とみられるが、今後西洋で生活するうえでは洋髪にせざるを得ないという考えもあったようだ。しかし断髪は武士の誇りに関わることであり、彼らにとっては苦渋の決断であっただろう。

さらには南下するにつれて加わる炎暑も一行を苦しめた。薩摩の暑さに慣れているとはいえず、熱帯の蒸し暑さは



異国の珍しい果物や甘味は留學生たちに強い印象を与えた。

耐えようがなく、出だしから苦しい船旅となった。

異文化との出会い

西洋式の挨拶に驚嘆

居心地の悪い出来事もあったが、それでも異国の文化は留學生らをおおいに興奮させた。最初の寄港地・香港では、夜景の美しさに「あたかも螢火ほたるびに髣髴ほうふつたり」と心魅せられた。初めて異国の地を踏んだ一行は市内見物を行い、その近代的な設備にも驚いたようである。その後もペナンの原生熱帯雨林や、ボンベイのイギリス式高層建築など、さまざまな異国の風景が一行を感嘆させた。一方で火山岩の多いアデーンでは「椋島の風景を懐かしむ一幕もみられた。

初めて口にするものも多く、特にパ



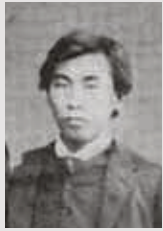
ほり たかゆき
堀 孝之

(天保15(1844)年 - 明治44(1911)年)
長崎のオランダ通詞(通訳)堀家の生まれで、薩摩藩英国留学生に通詞として参加。以後、五代友厚の事業を生涯支えた。
写真：鹿児島県 歴史資料センター黎明館 蔵



まつむら じゅんぞう
松村 淳蔵

(天保13(1842)年 - 大正8(1919)年)
薩摩藩英国留学生としてロンドン大学で海軍測量術を学び、その後アメリカで海軍術を学ぶ。帰国後は海軍に入り、海軍兵学校長として海兵教育の発展に貢献した。
写真：鹿児島県立図書館 蔵



なごや ときなり
名越 時成

(弘化2(1845)年 - 大正元(1912)年)
薩摩藩英国留学生としてロンドン大学で陸軍学術を学び、翌年帰国。帰国後は戊辰戦争に出陣し、その後奄美大島に身を置いた。
写真：鹿児島県立図書館 蔵



とうごう あいのしん
東郷 愛之進

(天保11(1840)年 - 明治10(1868)年)
薩摩藩英国留学生として海軍機械術を学び、翌年帰国。戊辰戦争に出陣し、東北を転戦中に死亡。
写真：鹿児島県立図書館 蔵



イナップルという桃のような味の果物は印象に残ったようだ。インド洋の船上では「アイス・クリーム」という氷菓子が振る舞われ、炎天下に氷を作る技術には留学生らも驚きを隠せない様子であった。

見るものすべてが珍しい旅の中で、特に強烈な印象を与えたのは、西洋人家族の別れの様子だろう。離ればなれになる夫婦や親子が人目もはばからずに接吻を繰り返す姿は、まさに異文化を見せつける出来事であり、その場に居合わせた留学生も「我輩は斯ることは、はじめて見たることにて驚嘆して居し、親敷別には口を互に吸うが尤もよき礼と聞及候」とその驚きを語っている。

初の蒸気機関車に乗車

ついに英国へ

一行はボンベイなどを經由しスエズに上陸。建設中のスエズ運河などを見学し、我が国にはない近代的な技術に驚嘆の声をあげた。また一行をさらに驚かせたのが、このスエズから乗車した蒸気機関車である。黒煙を吐き出しながら時速約40キロメートルで走る汽車は「其早きこと疾風の如し」と評された。汽車は約四時間でアレクサンドリア

アに到着したが、その間にもヒラミッドや水牛、ラクダ、羊の群れなどさまざまな車窓の景色が一行の目をみはらせた。現在、一行はアレクサンドリアから豪華客船「デルヒ号」に乗り込み、マルタなどを經由してイギリスへ向かっている。約二カ月の旅を経て、同国サザンプトン港には慶応元(一八六五)年六月二十一日頃に到着する見込みである。



日本からイギリスまでの航路

※本紙は薩摩藩英国留学生の当時の様子を紹介する企画です。本文中の時間は新暦とします。

次回
ロンドンでの生活
はじまる